ビッドル来航①

弘化三年（一八四六）閏五月二十七日、アメリカの東インド艦隊司令官ジェームス・ビッドルに率いられてコロンバスとヴィンセンスの二隻の軍艦が来航した。

前日の二十六日に浦賀へ入った尾張の廻船から「二十三日に新居沖（静岡県浜名湖）で異国船を見かけたという情報がもたらされた。また沼津藩からは領分の白浜村（下田市）の沖合いを異国船が通過したとの情報があり、さらには伊豆韮山の代官所からも異国船が相模の方へ向かっているとの通報があった。

こうした報告を受けた浦賀奉行・大久保因幡守忠豊は「御備場之義は油断なく」と言い渡した。二十七日の朝、三崎にある浦賀奉行所の出張所である役宅から「城が島の沖合いに異国船二隻発見」の連絡がきた。

これは江戸湾警備を命ぜられていた川越藩にも三崎町久野又兵衛の手代から通報があり、川越藩も警備体制を敷くことになった。

浦賀奉行所は、与力・同心・通詞を乗せた見届船を六番まで出し、警戒にあたり、奉行は自ら平根山に出向き、全般の指揮をとるとともに、川越・忍両藩にも非常警備体制に入るよう要請した。

見届船が江戸を目指している異国船を見つけ、野比沖に停船させ、国元などを尋ねたところ、アメリカ船であることが判明した。軍艦は大きい方をコロンバスといい、長さ約七十六m、幅十六m、乗組員八百名、大筒八十六門装備されていた。小さい方はヴィンセンスといい、長さ三十九m、乗組員百九十名で、二十四門の大筒を装備していた。

この大筒の数は三浦半島と房総半島に装備されていた大筒の数の一・七倍にあたり、コロンバス一隻分にも足りなかった。

この日、大久保奉行が幕府に宛てた注進状には「通商を希望して来航したこと、多数の大砲を装備しているので、今までの例にならって、出航するまで預からせてもらおうとしたが、強固に拒否され、それ以上こちらが、強圧的にでると戦争になる恐れがあったので、そこまでにして、浦賀沖は危険であるので、野比沖に停泊させ、

周囲を警備船で囲み厳重な警戒をしていること。薪水に関してはできる限る要望に沿うこと。通商に関する書面を受け取ったが、英語で書かれているので急には翻訳できないこと」などが報告された。

二十八日になると、在府であった一柳一太郎奉行が浦賀へむけて出立した。大久保は大津の川越陣屋へ使者を出し、「大量の武器を持っているので安心できない。」といい、川越藩にはより厳重な警備を頼んでいる。この要請は房総半島側を警備している忍藩にも同様の要請をしている。

この大久保奉行は三代将軍・家光の時に活躍した大久保彦左衛門の家系であり、九代将軍・家重の実母を輩出し、旗本の中では名門であった。前年のマンハッタン号の時も浦賀におり、陣頭指揮をとったのだが、ビッドルの来航では地に足がついていないようなに見受けられる。これも大量な武器が原因であろうか。

浦賀沖が危険であるということで、野比沖に停泊させたので、警備に出ている船へ食事を運ぶのも大変であり、ついにはお米と味噌を警備船へ届け、警備船のなかで調理をしてもらうことになった。（了）